
願いの種

唯羽 ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
願いの種

【Nコード】
N8467A

【作者名】
唯羽 ヌウ

【あらすじ】
少年時代の少し不思議で少し楽しいお話。

ある日曜日の昼間、僕は幼稚園を卒業間じかの息子と公園を散歩していた。

その日は3月にしては暑く天気もよかった。

「いい天気だなあ」 裕一

「うん。でもただ歩いてるだけじゃつまらないよ。なんかしてあそぼー！」

「そういつてもな。ここは公園とはいうけど遊具なんて何もなしな。どうしようか？」

そう言つて息子を見ると、裕一は「ん」などといって腕を組んで考えている。なんとなく微笑ましくなつて笑つてしまった。

「よし、じゃあ父さんが面白い話をしてあげよう」

「え。話なんかつまらないよ」

「いいからいいから。ほらそのベンチに座つて」

裕一はしぶしぶといったかんじてチヨコンと座つた。

「それでは父さんの昔話をしてあげよう」

そういつて僕は話し始めた。

「実は父さんも裕一くらいの時にこの近くに住んでるんでんだ。

そしてこの話は父さんが裕一くらいの年のときに、まさにこの公園で経験したことについてなんだ」

そのとき僕は一人で公園にいた。

いまから考えると、僕はまだ5歳くらいときだったからお母さんが近くにいなかったのが不思議だ。でもとにかく僕は一人だった。

勝手に家をでて、そのままぶらぶらしてたのかもしれない。僕はやんちゃだったみたいだからね。

季節は・・・確か夏だったかな。当時人気だったアニメのTシャツを着てたよう気がするし、そもそもあの公園には虫取りに行ったんだ。

あのころは男の子の間で虫取りがとてもはやっていた。今みたいにテレビゲームもないし、とにかくあたりに自然が溢れていた。ちよつとした林にはカブトムシやクワガタがいたし、川に行けば魚がたくさんいたんだ。

そこで僕は夢中で虫取りを始めた。たいしたものはいなかったけど、バツタやおろぎがたくさんいた。捕まえようとしてもピヨンピヨンはねてなかなか難しいのだ。

それからどれくらいそうしていたか分からないけど、しばらくバツタと格闘した後、ふと周りを見ると一人のおじさんが公園の真ん中でしゃがみこんで何かをしていた。

僕は「あれ？」と思った。さっきまで僕一人だったのにな。いつの間にもいたんだらう？ 虫取りに夢中になって気づかなかつたんだらうか？

しばらくぼーとして眺めてたら、おじさんもあれ？ って感じでこつちを見てきた。

「君は見えるのかね？」

「え？」

「見えるって何をだらう。」

「ああ、いや、こつちの話じゃ」

「ところで君の名前はなんと言っんじやのう？」

「ええ」と。祐太郎・・・」

「ほお。祐太郎君か。いい名前じやのう。」

「なぜだらう？ このおじさんと話していると不思議な感じがする。」

「え」と、おじちゃんは何をしてるの？」

「ん？わしか？わしは願いの種を蒔いてるんじやよ」

願いの種？なんだろうそれは。おいしいんだろうか？

「ははは、これは食べ物じゃないんじゃないよ。もしかしたらおいしいのかもしれんが」

「じゃあ何なんだろう。」

「ふ〜む。坊ちゃん。空は何色かしてるかね」

おじいさんは唐突にそんなことを聞いてきた。そんなの青に決まってるじゃないか。

「ん〜」

おじいさんはそうつぶやいてからこういった。

「空が青というのは間違いない。赤や黄色や緑になることもある。空に限らずすべてのものは色々な色を持ち、色々な姿をしているのじゃよ。人にもそれは当てはまるのじゃ。みんな同じように見えて、姿や性格、考え、好み、どれをとっても全く同じ人はどこにもいない。人の願いも同じなのだよ。みんなたくさんさんの願いをもつと思うが、それはすべて異なるものなのじゃ。1000人いたら1000個、いや10000個以上の願いがある。それらの膨大な量の願いをわしがここに蒔いとるんじゃない」

「蒔いた種はどうなるの？」

「やがて数十年したらでっかい木ができ、たくさんの花が咲くのじゃ。そうするとその願い事がかなうんじゃないよ」

「ふ〜ん」

僕は少し考えて、あることを思い出した。

「それならすべての願いは叶うはずでしょ？でも僕はいつもお願い事してるけど、一つも叶ったことないよ」

おじいさんはまた「ふ〜む」と言っつて、少し寂しそうな顔をしながら言った。

「実はこの実な、自分勝手な望みは叶えてくれないのじゃよ。人のことを真剣に思いやり、人の役にたつような願いや、人の幸せを本当に願う人の望みしか聞いてもらえないのじゃ。そして何よりも木がなるのに数十年かかるので、数十年後の願いじゃないと叶わな

いのじゃ」

「なあ〜んだ。つまんないの」

それじゃあほとんどの願いは叶わないじゃないか。

「坊ちゃんは何か数十年後に叶えたい願いはあるかね？」

う〜ん……。

考えたけど何も出てこなかった。

「ははははは。君はまだ若いからのう、ゆっくり考えればいいのじゃ。大きくなったら叶えたいことが出てくるじゃろ。いいか？そのためには人のことを考えられる人間にならないとだめじゃぞ」

「うん！」

「よし、じゃあそろそろお別れじゃ」

「え〜。もう？」

「もう仕事も終わったしの」

「またいつか会える？」

おじいさんは微笑んで、そして約束してくれた。

「君が大人になってまたこの公園に来てくれたら会えるかもしれないのう」

「本当？ 約束だよ」

「おお。約束じゃ」

「では今度こそ本当にお別れじゃ。空を見てごらん」

そういわれて僕は空を見上げた。そして驚いた。空はもう真っ暗だった。半分の月が僕たちを照らしているだけだった。そんなに長い時間話をしていただろうか？ そして驚きのままおじいさんを見た。そこで僕はもつと驚いた。おじいさんが跡形もなく消えていたのだ。どこに行ったのだろうか？ あれは夢だったのだろうか？

そう思ったところで僕は足元をに目をやった。

そこには本当に本当にちっちゃいけど、確かにしつかりとした芽が出ていた。

「……」

しばらくの沈黙が続いた後、僕は口を開いた。

「どうだ？ 裕一。不思議な話だろう？」

そうして僕は裕一の方をみて、そしてあきれた。息子はベンチに寄りかかり、口を半開きにして寝ていたのだ。最初は少しムツときたが、あまりのかわいさに笑ってしまった。仕方がないおぶって帰るか。

起こさないようにそっとおぶってから、公園の出口に向かって歩き出した。

そして出口のところで公園を振り返った。その公園の真ん中、そう、あのおじいさんが立っていたところには大きなそして満開の桜の木が立っていた。

そして僕はおじいさんのことを思い浮かべながら一つのお願いをした。

『裕一が元気に健やかに育ってくれますように……』

(後書き)

初めて小説を書いてみました。
感想などいただけるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8467a/>

願いの種

2010年10月8日15時11分発行